

## 2018 Society for Research on Biological Rhythms (SRBR) Meeting に参加して

本宮 雅晃

東京大学大学院 理学系研究科 生物科学専攻

2018年5月、フロリダにてSRBR (Society for Research on Biological Rhythms) の学会が5日間に渡って開催された。本学会は、生物リズムに関する世界中の著名な研究者が一同に会する、若手の時計研究者にとっては夢のような機会である。私は今回この一大イベントに参加する機会を頂けたので、拙筆ながらその体験記をここに記す。

学会の一番の醍醐味は、様々な研究者との出会いにあった。特に国際学会は、日本国外の偉大な研究者と交流を持てる貴重な機会だ。時計研究者ならその名を知らぬ者はいない、あの諸先生方と実際にお話しができたことは私にとって大きな刺激となった。加えて今年のSRBRには、本学問分野の開拓者として2017年にノーベル賞を受賞されたMichael W. Young氏とMichael Rosbash氏も参加されており、彼らの貴重な公演を生で聞くことができた。ジョークを交えながら話す彼らのノーベル賞研究の裏話に聴衆は大盛り上がりで、公演終了後の会場はスタンディングオベーションの渦に包まれた。修士の身分で海外学会に参加する機会を頂けただけでも幸運であるのに、ノーベル賞受賞者の話まで聞けたのはまさに奇跡的である。欲を言えば、彼らに会えた記念のツーショットが欲しかったが、さすがにそれは叶わなかった(余談だが、私と一緒に学会に参加していた同期のA氏は、ちゃっかりツーショットをゲットしていた。その満面の笑みに若干イラッとしたが、これが彼女の圧倒的な交渉力だ。完敗である)。彼らのような雲の上の人たちとの出会いも貴重であるが、気楽に話せる同年代の研究仲間との交流もまた素敵な思い出となった。ニックネームで呼び合えるほどの友人を作れたのは、今回の一番大きな成果かもしれない。互いの研究について真面目な議論を交わした後は、部屋でトランプに興じたりもした。プレイしたのはタイの“Slave (奴隷)”というゲームだ。それぞれの持ち札から、相手の出したカードより強いカードを交互に出してゆき、最初に手持ちのカードを0枚にしたら勝ちというゲームである。一番強い

カードは2で、最弱は3だ。もうお気づきの方もいるだろう。タイの“Slave”とは、日本で言うところの“大富豪”だ。「そのゲーム日本にもある〜!!」などと部屋ではしゃいだあの楽しいひとときを忘れることはないだろう。ちなみにその後は、その友人たちと冗談で「I'm your slave.」などと言いながら会場のドアを開けてあげたりしていたのだが、傍から見たら謎の主従関係で結ばれたあやしい集団に見えたに違いない。

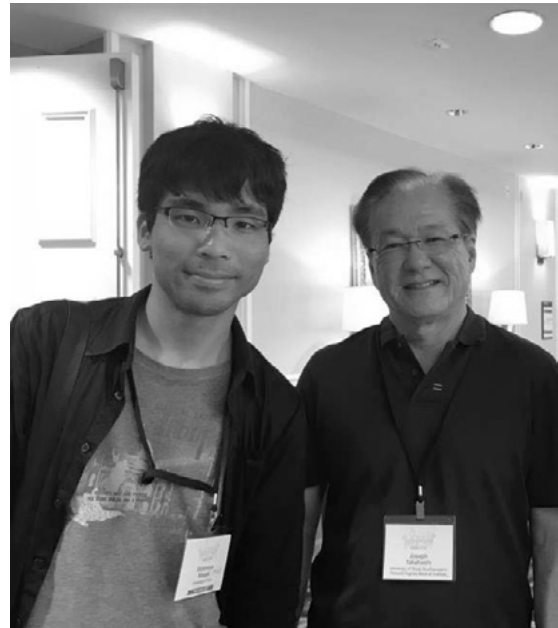
さて、この学会期間中に私はシンポジウムとポスターセッション合わせて60名以上の発表を聞くことができたわけだが、印象的であったのは、私の研究対象であるCryptochrome (CRY)に関する発表が非常に多かった点である。特に、構造解析など私の専門外の実験系からCRYの機能にアプローチした発表は非常に勉強になった。そして、この貴重な機会にただ発表を受身的に聴くだけではもったいないと、私は講演後に積極的に質問することを心がけた。百名以上の聴衆が注目する中、英語で質問するハードルは並大抵のものではなかったが、その分、質問が通じて満足のいく回答が得られたときの達成感は大きかった。世界の優れた研究に数多く触れられたことで、レベルの高いコンペティターが様々な方面から研究を進めているということを私は改めて実感し、危機感を覚えると共に身の引き締まる思いがした。かように世界の研究レベルに圧倒されながらも、一方で日本人研究者のはしくれとして誇りに思うこともあった。というのも、昨年の秋に私は京都の時間生物学会に参加していたのだが、そこで私が感動した発表は、世界レベルの研究と並べてみてもやはり輝いて見えたのである。論文数の減少から日本の科学力の低下が叫ばれている昨今ではあるが、(少なくとも時間生物学においては)日本もまだまだ大きなバリューを発揮していると感じた。

こうした国内外の優れた研究者の中で、僭越ながら私もポスター発表をさせて頂いた。他者の研究のインプットより、自分の研究のアウトプットの方が個人的

には楽しかった。今回は特に会話の全てを英語で行わなければならないため、自身の研究を分かりやすく魅力的に説明する難易度は格段に上がるが、その分、やりがいも大きかった。初めはたどたどしかった説明が、回数をこなしていくうちに上達していく様子が自分でも実感できた。しまいにはすっかり英語ネイティブ気分になり（注：あくまで「気分」である）、日本人同士の会話でもついうっかり「I see.」とか「Exactly!」などと言いついてしまうくらいであった。以前は、テレビでハーフタレントがネイティブ発音で「Yeah!」などと言っているのを聞くと、なぜか少々鼻についていたものだったが、今思うと彼らもきつとわざとではなく口からついて出てしまうのであろう。話がそれたが、つまり、それくらい英語漬けになれたということである。これもやはり、海外の国際学会ならではの貴重な経験である。

文才なき故に非常に読みにくい体験記になってしまったが、本学会にて私がたくさん刺激や学びを得られたことは伝わったと思う。この成長を無駄にしないよう、今後も研究に邁進していきたい。最後に、ここまで私の指導にあたってくださった深田先生や吉

種先生をはじめとする研究室の方々、及び、渡航費をサポートしてくださったライフサイエンス振興財団に、この場を借りて深く感謝申し上げます。



筆者(左)と Prof. Joe Takahashi (右)



学会で知り合った同世代の友人たち

左から筆者、Xianlin (中国)、Feem (タイ)、A氏 (同期)。私は一時彼らの奴隷となった (本文参照)